

課題解決場面における母子相互作用 に見られる「指示」と「受容」

星 野 命（国際基督教大学）

研究目的：

一組の母子が協同して取り組む課題の解決場面において生起する種々の相互作用を、ビデオ装置を用いて記録し、それを生態学的観点から分析する。すなわち、母が子どもの行動や発言を受容（肯定的に認）する程度と、子どもが母の行動や発言を受容する程度を分析するとともに、一連の相互作用の中で指示-示唆の程度と、それにかかわる要因を追究する。

研究方法：

(1) 研究対象：9歳，11歳，13歳の男女各10名と、それぞれの母親（専業主婦と家業従事者半数ずつ）計60組

(2) 課題：ひとりで短時間に解決することの難しいパズル（はめ絵・寄木細工など）を協同して解くこと

(3) 追加条件：①子どもを少しく不安状態にいたり、②母親に少し改まった態度をとらせたりして場面に工夫を加える。いずれの条件の場合も、10～15分実施。

(4) ビデオの供覧と「ふりかえり」

課題解決場面における相互作用の生起を観察しビデオに記録したあとで、実験中の自他の気持について「ふりかえり」質問に答えてもらったのち、先のビデオ記録を再生して、母子別々に視

聴させ、いくつかの質問に答えてもらう。たとえば、「今見た画面での母子のやりとりは、いつも家でしているふるまいと同じか、違っているとすれば、なぜか」など。

(5) 分析の方法

母子相互作用の過程と「ふりかえり」の結果は、母親の社会・文化的条件ごとおよび子どもの年齢、性別ごとに、母子それぞれの指示-示唆および受容-拒否の次元について、その程度と、それにかかわる要因に関して分析される。

予想される研究結果：

(1) 母子相互作用は子どもの年齢の上昇につれて、行動面・言語面、また受容の程度に関して変化が見られるであろう。そしてそれは、課題や追加条件によるよりは、母子間の継続的対人関係の質を反映するであろう。

(2) 母親が専業主婦の場合と、家業に従事している場合とでは、母子相互作用の二次元において差が見られるであろう。

以上について検討するために昭和59年度において実験を行ない、次年度以降においてデータの分析を行なう。なお、研究は上記分担研究者のほか、一名の助手と二名の大学院生が参加して行なう。